

シンポジウム1

童心と老成をつなぐ情報学

— 長寿社会の子どもが築く未来の地域と文化 —

座長：沢井佳子（チャイルド・ラボ所長、静岡大学客員教授）

子どもが大人と愛着関係を結ぶことで認識と社会性が発達するように、高齢者においても、新たな愛着形成が認知機能の発達を促すことが、近年、臨床的に見出されました。子どもと高齢者とが愛着をもって交流すれば、子どもには、言葉や技能、地域の文化を学ぶ恩恵があり、高齢者には、経験知を未来へ残す希望があります。本シンポジウムでは、長寿社会で育つ子どもと高齢者をつなぐ、具体的な提案がなされました。

鈴木氏 子育て環境の充実を図る浜松市の伝統は、子どもの誕生を祝う「浜松まつり」に見られます。町内会や消防団等の地域コミュニティの基盤を強固にし、子どもを中心に多世代が交流する機会になっているのです。伊豆半島と同じ広さで、市街地から限界集落までを含む「国土縮図型」の浜松だからこそ、「課題解決先進都市」として、日本の問題解決のモデルを示せるのだと考えています。

安西氏 「子どもたちが目を輝かせる瞬間—そのスイッチがどのように入るのか？」が認知の研究者としての私の関心事です。18歳人口が過去10年で80万人も減少した日本で、未来に生きる子どもには「①主体的に生きる②多様な人々と生きる③協力して生きる④感謝して生きる⑤誇りに生きる」ことが求められます。目標を発見し答を見つけ、人の気持ちを察する想像力を養うには、気持ちが通い合う人とのつながりと、ふるさとのように安心して戻れる場所が必要です。『二十四の瞳』で小学1年生達が「おなご先生に会いたい」と願い、社会的インタラクションを経て「会いに行く」という目標を

見つけたように、「他者との出会い」は、「目標の発見」に重要な役割を果たすのです。

榊原氏 高齢化した社会では、人々の経験知の平均値が高くなります。Active LearnerまたはInformation seekerである子どもにとって「知識がたっぷりある高齢者」が多い社会は、生活や遊びの中で学びやすい社会なのです。「多種多様なメディアを使いこなす子どもたち」と「情報を出したくてしかたがない高齢者たち」とをつなぐシステムを作り、子どもと高齢者との出会いを創出したいものです。

竹林氏 ユマニチュードを学んだお蔭で、私は幼い孫たちとうまく付き合えています。「子育て浜松フォーラム」という、子育ての主観的知識を客観化するウェブサイトを作ってきました。コンピュータを用いて個人の経験をモデル化すれば、子育てや認知症ケアの知識を客観化できます。介護環境は閉鎖的で主観的ケアが行われがちですが、認知症ケアも、顔の見える知識と映像コンテンツで表現すれば、人々のQOLを高めるケアが実現できます。長寿社会の多様な人々をアシストする情報学を設計したいと考えています。

鬼頭氏 歴史人口学の視点から見ると、現代のような人口の減少は、江戸後期から明治初期、平安から鎌倉時代、縄文時代の終わりにも見られ、新しい発展の前の準備期に起きています。準備期の今こそ教育を変えるべきでしょう。生存年数が伸びて、家族と同居しない高齢者も増えますから、地域と人間への愛着を、へその緒のようにつなぐ仕掛けも求められています。「社会の持続可能な発展」の発明が今後の課題なのでしょう。

「子ども第一主義で未来をつくる」

鈴木康友（浜松市市長、静岡大学客員教授）

「未来に生きる子どもたちのために—「目標」はどこから来るか？」

安西祐一郎（日本学術振興会理事長）

「Information Seeker と Provider」

榊原洋一（日本子ども学会理事長、お茶の水女子大学副学長）

「子どものための、情報学による、長寿社会デザイン」

竹林洋一（静岡大学大学院 総合科学技術研究科教授）

話題提供者

コメンテーター

鬼頭 宏（静岡県立大学学長）